

これまでに、ペスタロッチの影響を受けた日本の教育界の先駆者の中から長田新(広島大学名誉教授)と澤柳政太郎(成城小学校創設)について述べてきましたが、今回から3回にわたって小原國芳(玉川学園創設)についてお話していきたいと思います。

小原は1887年、鹿児島県の生まれですが、早くに母を亡くし、家も没落したため、進学を断念して13歳で通信技術養成所に入り、その後電信所の技手となります。しかし向学心に燃えていた小原は、18歳で鹿児島県師範学校に入学。興味を持っていたキリスト教を学ぶために訪ねた教会で、小学生の授業を頼まれ、毎週教会に通うこととなり、洗礼も受けています。その後、父親の借金返済問題から郷里の素封家の養子となったことで、1909年に広島高等師範学校英語科に進学することができました。卒業後は1913年に香川師範学校教諭となり、独自の手法を取り入れた授業を展開していきます。その後、1915年に29歳で京都帝国大学文学部哲学科に入学し、1918年に卒業。その時の1500ページにも及ぶ膨大な卒業論文「宗教による教育の救済」は後に改稿して、『教育の根本問題としての宗教』として刊行しています。

小原にとっての本格的な教育活動は、前回お話しした澤柳政太郎が、京都帝国大学総長を退官後、民間教育家として活動し始め、1917年に新教育の実験校として東京市牛込区に私立の成城尋常小学校を設立し、児童の自発性を重んじた教育を展開していく時に、長田新の推薦により、同校に招聘された時からです。そして、1921年、小原は自らの思索と成城小学校での実践をもとに「全人教育」を提唱します。「全人教育」とは、完全で調和のある人格を育むべきであるとするもので、小原は従来の教育で欠けていた道徳、芸術、宗教などを重視しています。

そして翌年には、小学校の卒業生が進学するための成城第二中学校が小原により開設されます。さらに1925(大正14)年に同校が現在の世田谷の地に移転し、成城学園となるのです。澤柳の指導の下、

「一、個性尊重の教育、附・能率高い教育 二、自然と親しむ教育、附・剛健不撓の意志の教育 三、心情の教育、附・鑑賞の教育 四、科学的研究を基とする教育」を掲げ、その実践に努め、新教育運動に大きな影響を与えていきました。尚、前述した小原國芳の「全人教育論」は、「八大教育主張」の一つとして、成城学園小学校主事の時に発表されたものです。

このような当時の小原國芳と澤柳政太郎の関係を『澤柳教育—その生涯と思想—』の中では次のように述べられています。「小原主事の来任とともに、成城は面目を一新して若々しい活気があふれだしてきた。主事は講演に著述に、さらに学校内容の改善に向って、全身のエネルギーを傾注した。間もなく成城の名声は天下に鳴るに至った。とくに教師自らの修養を『進みつつある人のみ人を教うる権利あり』の信念に徹底させ、同人の大学入学、海外研究派遣等が計画され、着々と実施された。これらが小学校教育者の修養に新しい刺激と記録を提供したことはいうまでもなく、小原主事の偉大なる卓見と断行であった。またこれと並行して研究雑誌『教育問題研究』が発刊された。これも当時としては破天荒のことであった。会員はたちまち六千を数えるに至り、小学校教育の羅針盤となった。(略)大正十一年に成城第二中学が生まれたが、同十四年には東京府下北多摩郡砧村に移転し、同十五年にはその原頭に成城高等学校が創設されることとなった。ついで昭和二年三月には成城高等女学校の誕生を見るにいたった。小原主事は獅子奮迅の勢をもって、縦横無尽に独走したが、それを無条件的な理解の下に温かく抱擁して十分の腕を揮わせたところに、澤柳博士の偉大さがあった。」と。

成城での小原のこの手腕は、この先、何処へ向けられていくのでしょうか。それは次回お話していくことにいたします。